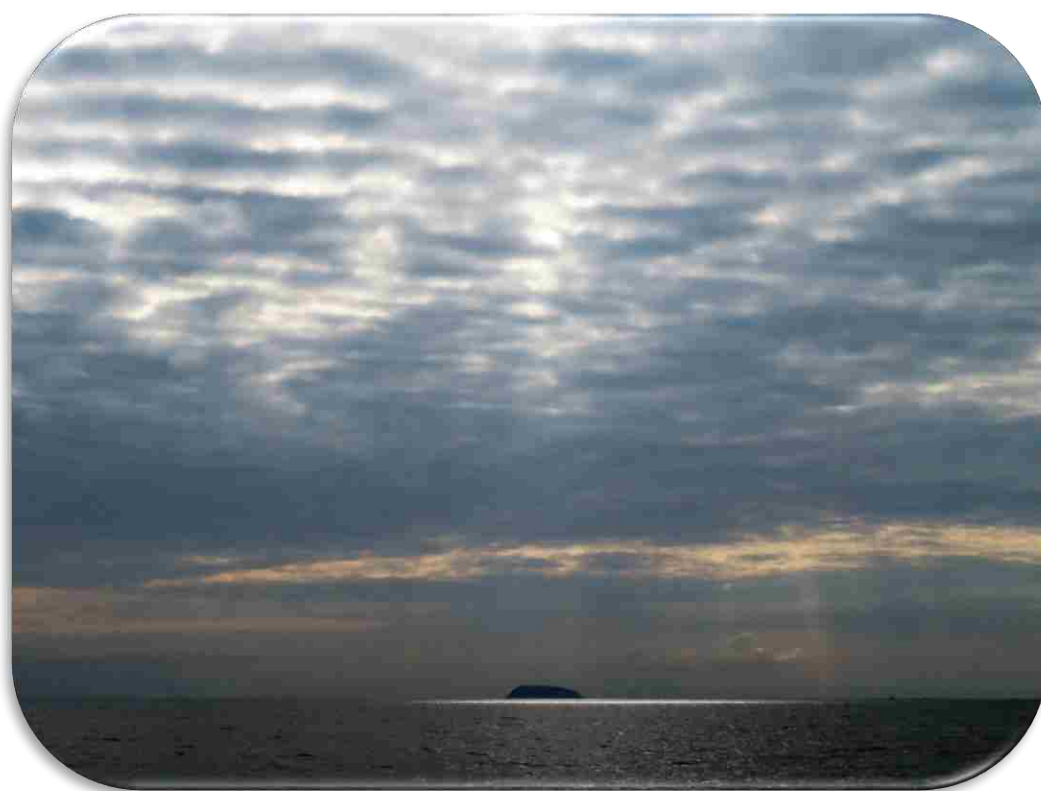


西播磨自然探検隊 活動報告

令和2年3月



西本 諭 前田 大輔 寺田 知広
野原 建広 池田 誠 杉元 伸弥

第9期西播磨地域ビジョン委員会



室津の海の漁業見学

日時：平成 30 年 9 月 17 日

場所：室津漁港 他

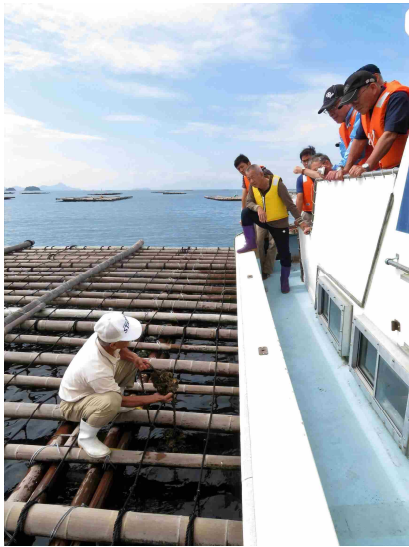
ビジョン委員 15 名にて室津漁協にお邪魔し、漁や牡蠣筏の見学、室津港を中心とする沿岸漁業の現況を伺った。



室津漁港から白浜沖まで漁船で案内いただいたが、途中、家島坊勢の漁船の巾着網漁を見学。2 隻で行う大掛かりな網なのでそれなりの人手が必要な様子で、外国人労働者の姿も見られた。



帰路室津湾に入り、牡蠣筏を見学。室津では牡蠣養殖を始め 20 年程だが、今やブランドとなりつつあり、養殖者も年毎に増えている。その筏には九州産の孟宗竹を使用するとのことだが、近年では耐久性のある CFRP 製のものも使われている。



温暖化の影響か、海にはかつては居なかった南洋系の魚が見られるようになり、特にナルトビエイはアサリ養殖に大きな被害を与えている。駆除し、かつ役立てようと調理法、革の加工品等研究中とのこと。

温暖化に加え、河川から流れ込む栄養が少なくなり双方の影響から、春のイカナゴの漁獲量は年毎の減少傾向にある。

かつて赤潮によって酸素濃度が減少、養殖魚が死滅するという被害が全国で見られたが、近年あまり耳にしなくなった。赤潮は海水の栄養過多によるプランクトンの異常発生が原因の一つと言われるが、全国的な下水道の普及により、家庭排水が浄化されて含まれていた栄養素が減少し、河川を流れて海に至る水系のプランクトンが減少した結果、赤潮も発生しなくなったようだ。

イカナゴ等の稚魚はプランクトンを主食とするため、その減少が漁獲量の減少につながっているようだ。

また、山の木が広葉樹の「雑木」から植林された針葉樹に替わり、その落葉の下を流れる水の質も変わってきているのではないかという疑問も聞かれた。



いずれにしろ、山を源とし、川を流れ、都市を通過し海に至る水系の各所での営みが、海で暮らす生き物、そしてそれを糧とする私たちの暮らしに影響を及ぼしていることを体感した。

自然が豊かで風光明媚な西播磨の海。それを守っていくのが私たちの使命だと感じた1日だった。

(自然探検隊 野原 建広 記)



西播磨自然探検隊 探検報告 vol.2

相生市猟友会の狩猟見学及び 鳥獣被害状況聞き取り

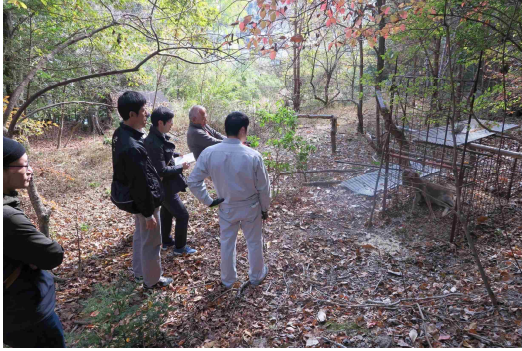
日時：平成30年11月25日

場所：相生市那波野 他

毎年、イノシシやシカによる農作物等の被害の報告が多数寄せられ、市としても猟友会を通じて捕獲を依頼しているが、なかなか被害が減らない状況がある。近年は、ワイヤーロープを使用した対策を一部地域で行ったり、市から猟友会への捕獲許可などの取得にかかる費用を助成したりしているが、効果が出るには時間が要することであり、効果的で速攻性のある対策は難しいと聞いていた。我々も、実際、どのようにして捕獲しているのか、最新の鳥獣被害の状況と対策はどうなっているのか、ということをお聞きしたい。相生市農林水産課の坂本氏と相生市猟友会の塚田氏に協力を得て、捕獲の見学と鳥獣被害の状況をお聞きいただくこととなった。



まず、塚田氏からイノシシとシカの捕獲に関する説明を受けた。被害状況としては、平成20年ごろに相生市の鳥獣被害が急増したが、その後、市が猟友会に捕獲を委託することで、最近の被害自体は減少傾向にあること、シカは新芽のみを食べるが、イノシシは農作物を掘り返してしまうため、被害が大きいとのことであった。塚田氏は、罠にかかったもの以外に、自動車にひかれたものや電柵にひっかかったものなどを含め、イノシシとシカをあわせて約100頭捕獲している（11月から3月まで）。捕獲したものは、基本的に焼却処分されるが、希望者がいれば、自家消費用として譲渡することもある。課題としては、塚田氏を含めて猟友会の方が高齢のため、後継者の確保が必要だが、担い手がない状況が続いている。さらに、委託料は一頭あたり一律の金額が支給されるが、餌代が支給されないなど、費用面の課題もあるようであった。



この日は、前日に仕掛けていた罠（檻）にシカがかかっていた。檻の中で暴れているシカの首を輪っかのようなものできつく締め続けると15分ほどで亡くなった。その後、自宅に帰って解体作業を見学させていただいた。食肉部分の解体作業を塚田氏自宅の車庫で実践。約30分の作業だったが、知識と技術が必要であると感じた。捕獲もそうであるが、手間と時間、費用がかかるため、人材の確保が急務である。

（自然探検隊 寺田 知広 記）



福井大池の野鳥観察

日時：平成31年1月19日

場所：太子町福井大池 他

池や湖に羽を休め、住家の軒先をかすめるように飛ぶ野鳥の姿を追っかければ、都市化が進む町の中でも「自然探検」できるのではないかと考え、「野鳥観察会」を企画しました。

とはいえ、徒然草のパクリではないですが、何事にも「先達はあらまほしきものなり」。そこで私たちは、野鳥観察の達人、三木敏史さん（太子町在住）を講師に招き、野鳥の魅力について教を乞うことに。

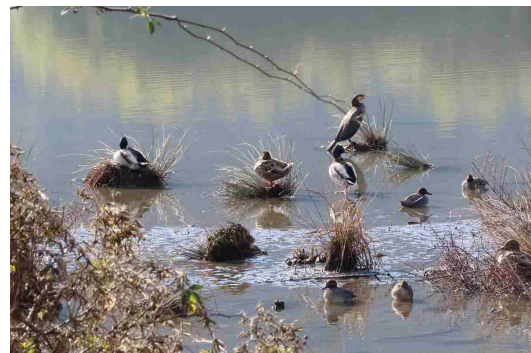


まず福井大池でフィールドワーク。まず三木さんの一言、「『モズ』って何て字で書くか知ってます？」

それなら知ってる。「『百舌』ですよ」
三木さんいわく「じゃあ、なんで『百舌』なの？」

ぐっ、分からん。答え教えてください。
「モズは他の鳥の鳴き声を真似るんです。だから『百の舌を持つ鳥』、で『百舌』と書くわけ」

なるほど～！ってな感じで、三木さんの面白野鳥トークにぐんぐん惹きつけられる私たち。三木さんの高性能望遠鏡をお借りして、遠くの鳥を間近にいるような感覚で観察しながら、三木さんの素晴らしいトークをお聞きするという、なんとも贅沢な時間を過ごした私たちでした。



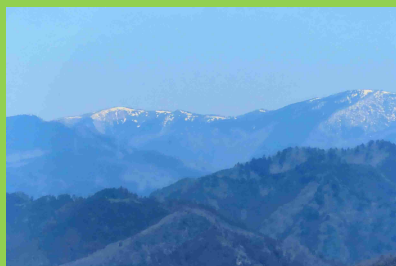
後半は場所を太子町地域交流棟に移し、三木さん撮影の写真を見ながらの講義。「環境省モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ調査員」でもある三木さんは、たつの市御津町の新舞子浜を中心に、シギ・チドリの調査もされています。しかし、埋め立てや洪水による河川土砂の流入により、シギ・チドリ類の生息環境も狭まっているとのこと。野鳥の種類や数を調べることは、我々人類が、自然に対してどのようなダメージを与えてきたかを調べることもかもしれません。野鳥の種は約600あるが、絶滅のおそれがある種もあり、それをいかに保全していくか。「一度無くした種は二度と復元できない」との三木さんの言葉に深く考えさせられました。

日本百名山や深山溪谷、自然を目玉にした観光地など、「自然のすばらしさ」を感じさせる場所は世の中に数多あります。しかし、自分たちが生活している身の回りで感じられる自然、それを大切に、その変化を敏感に感じ取り、身の回りの自然が痛めつけられていると感じたら、自分にできる「プチ『エコ』」を実践すること、それが大切なんだと、三木さんの話を伺って思いました。

「自然観察は何も山野に行かなくても、住宅地近くでも行うことができる」。これも三木さんの言葉です。自分の身の回りの自然にもっと敏感になる、それが自然保護の第一歩なのかもしれません。



(自然探検隊 池田 誠 記)



国見の森 森林セラピー体験

日時：平成31年3月9日

場所：国見の森公園

西播磨地域ビジョン委員「西播磨自然探検隊チーム」では、西播磨の山や川、海等の自然の魅力をテーマに据えて、活動を行いました。



今回は、森林の中で過ごすことで、リラックス効果が得られるという、森林セラピーを体験するため宍粟市の国見の森へやってきました。

宍粟市では平成27年3月に県下初の森林セラピー基地の認定を受け、現在では3つのセラピーロードを整備し、森林セラピーの普及に取り組まれています。

今回セラピーを実施した国見の森公園は、山頂付近までモノレールで登ることができるため、アップダウンも少なく子どもやお年寄りの方でも気軽に体験できるコースではないかと思えます。

ガイドの方にコース上の植物の説明を聞きながら、木々の感触や香り、ウグイスの鳴き声等、景色を見るだけではなく、五感を働かせながら森林の中を散策することで、自然を満喫することができました。



セラピーの中には森で寝転ぶというプログラムがあり、単に散策をするだけでは気づかない、地面の感触や香りを感じることができました。

森林セラピーは、癒し効果や病気の予防効果が科学的に認められており、セラピーの前後には計測器でストレス度を測定することができます。

現代社会は科学の発展や技術の進歩により、日常生活は非常に便利になりました。その一方で里山の減少等、日常的に自然と触れ合う、体感する機会は減少しています。

そのような社会で、日常生活での心身の疲れを自然の中で癒す森林セラピーは、自然の魅力を教えてくれるのではないかと思います。



(自然探検隊 杉元 伸弥 記)



西播磨自然探検隊 探検報告 vol.5

千種川圏域清流づくり委員会見学

日時：令和元年5月25日

場所：秋里川、下秋里公民館

私たちが、千種川圏域清流づくり委員会の活動が参考になれば、という気持ちで見学に参加したのは、五月晴れの5月25日（土）でした。

この日は、佐用町の依頼を受けて毎年実施されているという、「さようこども体験くらぶ」による「千種川の水生生物を観察しよう」というイベントがありました。恒例というだけあって、今回は神戸から参加した子どもも含め、30人程度が参加していました。



佐用川の支流の秋里川の下秋里公民館を基地に、川の生き物調査をするという活動で、初めに、横山正先生による地域や川の説明、注意事項等の話があり、班編成が行われました。

ひと時の交流時間を過ごしたあと、子どもたちはそれぞれ川に入り、歓声を上げながらさまざまな生き物を捕まえ、バケツに入れていました。

「人は、自然の中で生かされているんだな」と感じる一コマでした。



その後、私たちは下秋里公民館を後にしましたが、子どもたちは、横山先生からの、自分たちが捕まえた生き物の名前や特徴に関する説明に、熱心に耳を傾けていたようです。



千種川圏域清流づくり委員会の活動は大変幅広いですが、基本的には、どのようにして千種川を中心とした流域の清流を守り、後世に残していくか、ということテーマに展開しておられます。

その期間も、すでに数十年近くにわたっており、今回接したメンバーの人たちからも、「かけがえの無い自然を後世に伝え残す」、そんな想いを、強く感じた今回の見学でした。



(自然探検隊 西本 諭 記)



西播磨自然探検隊 探検報告 vol.6

揖保川漁業協同組合 鮎種苗センター見学

日時：令和元年9月4日

場所：揖保川漁業協同組合 鮎種苗センター

【活動報告】

西播磨の自然を語ろうとすると、いくつかのテーマが思い浮かびます。「穴栗の山々」「瀬戸内海」と並んで思い浮かぶのが「清流揖保川」ではないでしょうか。兵庫県穴栗市の藤無山に源を発し南流。たつの市を貫流し、瀬戸内海に注ぐ揖保川は、西播磨を象徴する河川であり、多くの恵みを私たちに与えてきました。

その中でも、全国的に有名なのが「揖保川の鮎」。揖保川の鮎を学ぶことで、揖保川の現状、ひいては西播磨の自然について考えようと、揖保川の鮎の種苗を育て放流している、「揖保川漁業組合 鮎種苗センター」を訪れ、漁協組合長の横田さんをはじめ役員・職員の方に話を伺うとともに、施設を見学させていただきました。



揖保川漁業協同組合では、350万匹の鮎を生産しています。鮎の生産は卵から育てる完全養殖と、稚魚から育てる養殖方法があるが、揖保川漁協では完全養殖を実施。また、天然鮎も、新宮町あたりまでは確実に遡上しているそう。

「揖保川といえば鮎」というイメージが定着していますがご苦労もあるそうで、その一つが「水がきれいになりすぎたこと」。

下水道整備が進み揖保川の水はきれいになりました。しかし、水がきれいになったこと、生物にとって住みやすい環境であるかどうかは別問題。水がきれいになるということは栄養分が減っていくということ。同じ話は、カキ養殖場見学に室津を訪れた際にも、室津漁業協同組合の方から伺いました。



また、森のお話も伺いました。森林も、広葉樹が多い方が自然としては好環境。そのような森だと、どんぐりを餌にカワガニが多く育つそうです。しかし、今の森林はスギやヒノキが多く、カワガニも山からいなくなってしまったと、話されていました。森と川、海はつながっていることは頭では理解していたつもり

ですが、その「つながり」の一つの形が、森林の植生の変化⇒川の生物種の変化、という目に見える形で示されると、自然のつながりの奥深さ、また、だからこそ、人間がちょっと手を加えてしまうだけで、その複雑かつ奥深いつながりに齟齬をきたしてしまうことがある、ということを実感しました。

最後には鮎種苗センター内を見学。小さな稚鮎が何千匹も泳いでいる様は一言で言うところ「かわいい！」。まさに「鮎の赤ちゃんセンター」です。幼児が見学しやすいように、子どもの目線の場所に覗き窓をつくるなど、漁協の方のお心遣いもとてもナイス！西播磨の子どもたちには、ぜひ見学してもらいたい施設です。

【所感】

漁業者にとって豊かな森林は大切なもの。今でも、漁業者が森に木々を植えているそうです。自然とは、ある特定の箇所、「点」で考えるのではなく、異なる地域のつながりである「線」、さらには「面」の発想で考えなくてはならないのだと感じました。

そう考えると、ここ西播磨地域でも「4市3町」という区分けされた市町の区分ではなく、「揖保川流域」「千種川流域」という「線」の視点、さらには、「西播磨」という「面」の視点で考えなくてはならないのだと思います。瀬戸内海に近い下流域に暮らす人々は、上流域の豊かな自然、豊富な河川の水や、その河川が運んできた肥沃な土地を活かして暮らしてきました。森林に近い上流域に暮らす人々は、豊かな自然を守り活かしつつ、下流域からもたらされる他流域からの産物、資源、情報などを取り込み暮らしてきました。言うなれば、「西播磨は一心同体、運命共同体」。そして、それを仲立ちしてくれているのが西播磨の豊かな自然。その自然から学び、恵みをいただき、遊ばせていただくことで、「西播磨は私たちのふるさと！西播磨の自然は私たちの宝！」という思いを共有することができれば、とても素敵なことなのだろうと思います。

(自然探検隊 池田 誠 記)

「西播磨自然探検隊」活動記録編集後記

「西播磨自然探検隊チーム」が編成されたのが2018年の6月でした。

私自身は、前期の第8期ビジョン委員から参加させていただきました。私が兵庫県出身でないことや、仕事を離れて自然に親しみながら、様々な学習や体験ができ、更に新たな仲間づくりできればと考えて参加させていただきました。2年間様々な企画に参加する中で、もう一期やってみたいと思い9期に参加いたしました。

9期では「森・川・海」をテーマに、西播磨の自然の魅力や課題を発信すべく、新たな発見と出会いを求めて6名でスタートいたしました。

メンバーは、各自の居住地を中心に体験や学習を、企画提案してもらい、それをチーム会議で協議・検討して翌月のチーム活動を準備しました。

チーム活動で沢山の事を感じることができましたが、特に西播磨の豊かな自然環境は思った以上の速さで悪化をしている事を感じました。

「森・川・海」の全ての変化を止める事は容易ではありませんが、自分達の子や孫へ、更に次の世代の為に、自分の出来る事から一歩前へ足を踏み出す事こそが重要なのだと感じました。

尚、最後の企画として「氷ノ山登山」を企画いたしましたが、当日天候不順により断念したことが、悔やまれます。

そして、2年間お世話いただきました、県の関係者、ビジョン委員会関係者に心より感謝申し上げます。大変にありがとうございました。

西本 諭